

第 2 回 教養体育主任者協議会 報告概要

(2017 年 3 月 24 日、筑波大学東京キャンパス)

1. 問題提起：大学体育の体系的FD

小林勝法（文教大学国際学部教授）

以前は体育学部や教育学部出身者で保健体育の教員免許を取得している者を助手や講師で採用し、体育組織がキャリア形成してきた。したがって、他領域のようなFDの必要性は低かった。しかし、近年はそうでない教員が増えてきたことや体育組織が弱体化したため、他領域と同様のFDが必要になってきた。そこで、大学院生(TA)から初任教員、中堅教員などの段階に応じた分野別FDについて、その内容を体系化し、FD診断シートを開発したので紹介する。また、本連合が行っているFD推進校表彰制度について説明する。

2. 大学体育・スポーツの現況（本連合の各種調査から）

(1) 大学スポーツの推進に関するアンケート（2016年10月）

会員大学298校の大学スポーツへの取り組み状況を把握することを目的として、学長を対象として実施した。調査項目は、「課外スポーツ活動支援に関する方針や中長期計画の策定」や「米国NCAAの取り組みで、日本でも導入すべきと思う事項」「日本版NCAA組織創立後の参加」など。

(2) 大学生のスポーツ経験と意識に関する調査（2017年3月）

会員大学14校および短期大学2校の協力を得て、約6,000人の学生のスポーツ経験と意識について調査した。調査項目は、「スポーツにおける体罰・暴力の経験」や「オリンピック・パラリンピックに対する意識」「大学スポーツ推進に関する意識」など。

(3) 体育・スポーツ・健康科目の履修に関する意識調査（2017年3月）

会員大学12校の協力を得て、約2,500人の学生の体育科目などの履修に関する意識について調査した。調査項目は、健康状態や科目履修の理由、希望種目など。

3. カリキュラム事例報告

(1) 大学院生を対象とした教養としての体育の意義と展望

高木英樹（筑波大学体育系教授、大学体育スポーツ高度化共同専攻長）

筑波大学は全国の大学に先駆けて、2007年度より「大学院共通科目」を開設している。大学院共通科目では自己の専門性の上に豊かな教養と倫理観を身につけ、バランスのとれた研究者や高度専門職業人となるべき「人間力の涵養」を目指している。科目は大きく7つの科目群に別れ、その中の「身心基盤形成」科目群の1つとして体育の授業が開設されている。平成28年度末時点では、9種目（つくばマラソン、水泳、バスケットボール、ボディーワーク、スノースポーツ、テニス、器械運動、マリンスポーツ、バレエ）の授業が開設され、延べ250名の大学院生が受講した。本報告では、大学院でなぜ体育の授業を行うのか、また今後どのように展開していくのかについて、具体的な事例を示しながら、情報提供する。

(2) 岡山大学「する・みる・支えるスポーツ演習」

鈴木久雄（岡山大学全学教育・学生支援機構教授）

岡山大学では、平成25年度より「する、みる、支えるスポーツ」対応授業を開講している。本学は平成17年度現代GPに採択され、「みるスポーツ」「支えるスポーツ」の授業化を推進してきた結果といえる。また「するスポーツ演習」ではe-Learningとリフレクションノートを活用し、身体活動増進プログラムを実践している。まだ各授業の課題は山積している。今回の報告を通して、授業改善に役立てたいと考えている。

(3) 専修大学における教養体育のカリキュラム

齋藤 実（専修大学経営学部教授）

専修大学では、平成24年4月から「新たな学士課程教育」構築の議論が進められた。保健体育科目も学士課程における体系性・順次性と教科内容について議論が重ねられ、1年次の必修として配置されていた「体育演習」を「スポーツ・リテラシー」、「スポーツ・ウェルネス」に変更することとなったが、必修にて継続されることとなった。一方、「体育理論」は必修から選択科目となった。そのプロセスとカリキュラムについて紹介したい。